

「インタートワイン・アライアンスーネットワーク関係と住民参加に基づいた
自然保全ガバナンスの協働的実現」

講師：マイク・ヴェッター（インタートワイン・アライアンス エグゼグティブディレク
ター

講義日：2013年8月22日（土）14：15～15：45

文責：愛知県豊橋市 大橋史明（研修生）

■導入

ダン・ヴィッツニー：最近、よく出てくるようになってきた考え方で、自然は、声を出さ
ないが重要なステークホルダーである。

そして、土地だけでなく動物を含めた地域、水だけでなく水辺の生物を含めた水域、生
きているもの全てがつながって一つのシステムを作っている。ポートランド地域の自然の
声をいろいろな所で代弁しているのがインタートワインである。

インタートワインの優れたところは、小さな組織であるにも関わらず大きな役割を担っ
ているということです。

■インタートワイン

マイク・ヴェッター：みなさん、ポートランドへようこそお越しいただきました。

みなさんは、ポートランドの魅力が何なのかすでにご存じだと思います。それは、ビー
ルです。

これは、冗談ではありますが、ビールを飲みながらソーシャルキャピタルについて話し
合っていくことはポートランドでは重要なことです。

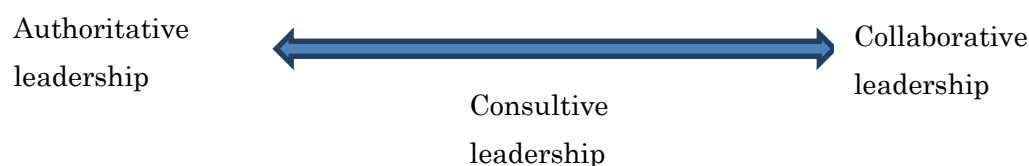
インタートワインのコンセプトは、3つあります。

一つ目が、「リーダーが協力する場」です。

リーダーとは、みなさんのように行政の方を含む地域でさまざまな活動をしている方々
を私はリーダーと考えています。

インタートワインを始めたのを6年前からで、2年前にメトロに移り、それからNPO化しま
した。

リーダーシップとは、権限を持ちながらのリーダーシップと協力的な関係をとるための
リーダーシップの取り方があります。ほとんどの行政のリーダーシップのとり方は、権限
の強いリーダーシップであるが、私たちのリーダーシップのとり方は、協力的なリーダ
ーシップのとり方をしています。



私たちが2年前にNPO化したときは、28のパートナーと仕事をしていましたが、今では100を超えるパートナーと仕事をしています。

自然保護を目的として活動をしている団体と一緒に仕事をしている。

そしてインタートワインのコアとなるミッションは、投資するということとまきこむということです。

投資をするとは、自然に対して都会の人たちがいかにアクセスがあるかということも多くしていくという意味での投資であり、市民や行政をいかに巻き込んで活動をしていくかにあります。自然システムへいかに溶け込んでいけるかと言うことで、水に対してアクセスができるか、自転車や歩行することができる環境を提供することができるかということです。公園、自然体で残しておける場所、都市の中にある森林を残していくことです。

これからの投資を進めて行くためには、コミュニティはどのような恩恵を自然から受けることができるかを考えていく必要がある。投資も公的投資だけでなくプライベートセクターからの投資も視野にいれており、自然のみで恩恵をうけるのではなく、交通、仕事の雇用、教育、健康を含めて考えています。このように取り組むことで、幅広い人たちとつながっていくことが重要だと考えている。もちろん財源が増えるということも考えている。

団体を結成した時になぜ多くのパートナーシップを持つようにしたかと聞かれました、自然にとって、ポートランドの動きは革新的であったが、それでもゆっくりであった。トレイルの完成にも190年はかかる。早く進めるために多くのパートナー関係を築いてきた。

投資をしてもらうためには、プロジェクトの目的は何であるか明確に伝える必要があります。参画している人たちが、私たちのプライオリティに同意をすれば出資をお願いする説得力が強くなり、説得力があればあるほどお金も得やすくなる。連合体によって出資をしやすい環境づくりをしている。参加している組織のリーダーにも、プライオリティを理解してもらう必要がある。

プロジェクト例を紹介しながら説明をします。

ポートランド地域には自然の保全のためのお金が、連邦政府や州から入ってきていなかった。自然保護全体を考えると、優先順位を決めて合意を得る必要、プライオリティを決めていく必要があるからです。つまり、州や連邦政府が作る自然保護計画では、細かいところが見落とされており、ポートランド周辺の森林は、分散しているため大きなメッシュの地図を考えると州や連邦政府が保護すべき森林はないように映ります。しかし、これを細かいメッシュで見えていくと、非常に多くの森林があることが分かります。

私たちは、地域レベルで自然保全をしていくための計画を策定していく必要がありました。自分たちで連合を作って何か月も話し合いながら都市の計画を作りました。昔ながらのやり方でやれば、5年間で400万ドルかけてやるような作業を、私たちは171の団体と75の組織から計画への意見をもらい、2年間で10万ドルだけで策定することができました。

その結果、連邦政府や州からも一緒にやらないかと誘われて、資金の調達が順調に進むようになりました。

次に私たちの2つめのミッションである「関わりをもつこと」についてです。

公園を保護する組織、トレイルを整備する組織や作る組織などいろいろな組織があります。しかし、各組織がそれぞれのホームページなどからバラバラに情報提供を行っていました。このやり方は効率的ではないし、利用する側にとっても利用しにくいです。そのため、あらゆる情報をまとめて管理できるホームページを作り、一緒に活動を進める組織や団体へ提供し、共有しました。

また、参加した37組織がそれぞれトレイルや公園などに立てていた標識の統一を図りました。これらは、同じテーマで同じ温度の絵を使って進めました。定期的に広告を打ってキャンペーンを行ってきました。

自然を楽しむことは、住んでいる場所でわずかな時間でもすることができると伝えてきました。

私たちはまた、全米の各協議会とも連携をしています。この連携では、効果の高かった事例の共有やキャンペーンを行った際の効果などを共有しています。

そもそもインタートワインは、メトロのプロジェクトの1つとして始まっています。そのため、最初は **consultative leadership** をとっていましたが、**collaborative leadership** へと変化してきています。

メトロは、インタートワインが **collaborative leadership** の方が良いかどうかを判断する必要がありました。また、権力、意思決定権をメトロからインタートワインへ移すかどうかを決断する必要がありました。そして、そのためには成果もシェアする必要がありました。話し合いの中でメトロのトップが成果もシェアするという決定をしました。

あらゆる成果をみんなにシェアしていくことは、私たちの誇りであると考えています。

メトロの2つの法案を住民投票にかけ、票を集めることができ、5,000万ドルの融資を集め16,000エーカーの土地をマネジメントしながら保護する決定ができました。

ダン：街中の自然をいかにつなげていき成果を出していくかを話してくれました。

インタートワインが成立しているのは、個人から地域規模の団体がある上でのことなのでその育成を含めてもう少し話してもらえないか。

マイク：メトロは2024の市町村を管理している。住民にはメトロの行政区に住んでいるという実感があると考えた方がいいです。

交通インフラ、水、自然などあらゆるものがなぜ地域にとって大切で、どのようにつながっているかを考えることが重要である。

今までの考え方では、人が住んでいないところに自然があって、人が住んでいるところには自然はないという考え方が主流であった。しかし、人が住んでいる地域にも自然はあり、自然と人のつながりを感じられないと自然を大事にしたいという気持ちが生じにくい。

これからは、人が住んでいるところで自然と人をつなげていくことが必要である。その

自然は、裏庭から森林まで大きさに差はある。これを実現していくためには、行政は団体と連携をしていく必要がある。

メトロのような都市部でどのように保全を行っていくかを考えると、いろいろな人が協力して組織として動かないと実現はできない。

NPO や行政、あらゆる団体との連携・協力関係ができあがっていたことから、保全するための土地の購入、広域のトレイルの整備、自然の保全といったことで成果を出している。私たちは、協力体制を基盤にしていろいろなことを協力して行っていけばよいと考えた。インタートワインは、あらゆる組織が関わっている。そんな関係がある中で、自然をどのように取り入れることができるかを考えてきたわけである。

■ 質疑

Q: インタートワインの活動は、住民に知られてきているようだが、インタートワインの名前や活動は、個人のレベルまで浸透していないように感じられるが、より浸透させていくためにはどのような取り組みが必要であると考えているかを教えてください。

A: 私たちの目的は、インタートワインを知ってもらうことではなく、自然に触れてもらうことが目的であるから、インタートワインを知ってもらうことにはこだわらない。だから、キャンペーンのチラシでもわれわれのロゴは小さくしてある。

A:

Q: インタートワインと他の組織でミッションを共有するために行っていることはなにか。つまり、思いを一つにして継続できている要因はなにか。

A: 私たちは2つのゴールに向けて動いている。

自然保護するために投資をいかに集めてくるかと言うことと、住民をいかに巻き込んでいくかと言うことを目的に活動しています。

その基本の2つに同意してもらえば、各組織の細かな活動内容には入り込まないようにしている。

チップス: インタートワインが組織を集めて活動を行っていることが、いかに効果的であるかを伝えたい。ビールを交えて等の社交的な場、組織自体が話す機会を設けることがうまいのでいろいろな価値観を持った団体が、集まる機会となっている。

A: やはり、ビールです。ソーシャルキャピタル、人の育成をすることを大切にしているが、するのは難しい。いろいろな人がいろいろな立場で集まるので、いかに良いものを作っていくかが重要。対立がありうる問題には口出しをしないようにしているが、意見を主張することが目的の組織もある。そういう団体は、ある社会問題に対して政策を進めていくのであるが、そういう団体の会合にはなるべく参加しないようにしている。

インタートワインの役割は、政策主張するグループを集めたり、彼らを系統立ててまとめたり、ファシリテートしたりとか、あらゆる組織が仕事をしやすいようにすることです。私たちの活動は、舞台を整えてあげることで声を一緒になってあげることではない。

ダン：昨日のイノベーションラボでもあったが、出発点をどこに定めるかが大切。

これは、推測ですが、インタートワインが始まったときかなりの議論がされたと思う。多くのグループが安心して協力できるような場を作ることを行い、2つのミッションを進めて行けるようにしたと思う。

インタートワインのミッションを2つに絞り込む作業は、いつどのようにして行い、合意をしたのか。

A：私はこの活動に携わって7年目です。今日、招待したけど来られなかった人物がいるが、彼は、43年間関わってきている。

人と人とのつながりを資本として、自然を都市部へ持って行くことを理解してもらうための主張を、説得をするには時間がかかる。

2つのミッションがである投資と関わりを築くことは、グループの代表が何人か集まって月に2回、2時間、6年間かけて話し合っただけで決めた。振り返ってみると、我々のミッションである投資とまきこみについては、自然にできたと思われるかも知れない。しかし、私たちが話し合った内容は、リーダーシップであり、どうやれば協議会の様に集まった組織が、どのようにすれば作られた権限・権力を活用して自然を都市部へ持ってくるか、ということ話し合った。

Q：日本では、同じ分野のNPO、特に近くにある組織同士は大概仲が悪い。それは、自分たちがやっていることがより良いことだと信じており、お金を同じところから持ってこなければならぬからである。私は、インタートワインが日本にもあればいいと思う。

組織を立ち上げ、運営していく上で苦労したことがあれば教えて欲しい。

A：私が経験した利害関係の相違は、私たちの考えることとあなたたちが考えることがことなるというようなものでした。投資のときに例える比喻ですが、限られたパイを分けるのではなく、いかにパイを大きくするかということです。

5,000万ドルの投資の法案が通った話をしましたが、これはまさにパイを大きくする活動である。アメリカの税制上の関係から自然の地域を買収するために住民投票をしたが、固定資産税から予算を割くというものである。そのため、その分他へ回すお金が減ると言うことになるため、多くの市長が、法案に反対した。

インタートワインは、市をパートナーとして仕事をしていた。プライオリティは、今後更なる大きな法案を通す時の障害になると考えている。

ダン：障害がありながらも進めて行くことは、美德だと思うし、その原動力は素晴らしいと思う。

Q：最初の段階よりもたくさんの団体に関わっているが、インタートワインのお金の使い道のルール決め方と何かあったときの責任についてと、メトロの事業から始まっているが、住民から遠い行政体のメトロが進めたくてこのような組織を作ったのか、話し合いの中で生まれた組織なのかどちらか。

A：インタートワインの組織の予算は小さく、人件費は6人いるが、フルタイム換算だと4

人分です。少人数で仕事をしているため、効果的に仕事をしなければいけない。協力関係が効率的に効果的につながるかを考えたうえで、プロジェクトの対象は広いが、その中で何をするかを決めていく必要がある。その決定は非常に難しい。

インタートワインをメトロの行政の事業から始まったが、そのままプロジェクトとして残すかNPOとするかは、非常に難しい判断だった。メトロの中にいたら、資金的には安定していただろうが、インタートワインは、残っていなかったと思う。メトロの中で進めていると、パートナーは限られメトロの事業と見られてしまう。NPOになったことで、メトロだけに限らず全てのパートナーと公平に付き合うことができ、新しいアイデアにも取り組むことができ、身動きをしやすくなったと思う。

■まとめ

ダン：マイクさんの話の中から、こういった形で活動をする団体がどれだけの力を持っているかを感じてもらえかと思いますし、マイクさんは非常に静かにとても謙遜しながら話をされていることから伝わるものがあるかと思います。